

研究ノート

ザンビア北西部における移入者のキャッサバ栽培と食料確保

原 将 也 *

Adoption of Cassava by Immigrants and Regional Livelihood Stability in Northwestern Zambia

HARA Masaya*

This paper examines self-sufficiency, in terms of food, of a multi-ethnic agrarian community from the perspective of newly-arrived immigrants in northwestern Zambia. The traditional staple foods in the area are indigenous Kaonde grains, such as sorghum and maize, whereas the Lunda, Luvale, Luchazi and Chokwe immigrants continue to cultivate cassava. Both groups open slash-and-burn fields and maintain a self-sufficient life in the miombo woodland. However, the yields of these grains are vulnerable to changes in rainfall. In addition, unstable subsidy policies and chemical fertilizer supplies from the Zambian government significantly affect maize yields. The Kaonde experience severe hunger during the off-season of their grain stores, whereas the immigrants harvest cassava tubers throughout the year because the tubers store well under the ground. Based on a meal survey, Kaonde households consumed cassava during the off-season. They obtained dried cassava tubers from immigrant households, which they purchased or exchanged for side dishes or labor. This study shows that the indigenous Kaonde people are able to interact with the immigrants in their everyday lives through the exchange of food, especially cassava tubers, and that mutually supportive relationships are being built through the bartering of food and labor.

1. は じ め に

キャッサバ (*Manihot esculenta*) は、アフリカの重要な主食作物のひとつである。全世界におけるキャッサバ生産量の半数以上をアフリカ大陸が占めている [FAO STAT 2015]。南米原産のキャッサバが、アフリカで栽培された最初の記録は 1558 年まで遡る [Carter *et al.* 1997]。ポルトガル人によってアフリカ大陸にもたらされたキャッサバは、在来の農法に組み

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2015 年 12 月 17 日受付, 2016 年 4 月 20 日受理

込まれながら、内陸部へひろまっていた。キャッサバは単位面積あたりのカロリー生産量が高く、耐乾性に優れて貧栄養な土壌でも生育することから、アフリカの農業に適合していった [Jones 1959]。多くのアフリカの小農が、このようなキャッサバを自給用や救荒用に栽培してきた [末原 1990; 伊谷 1995; 村尾 2012 など]。近年ではキャッサバは、食料の安全保障という観点から世界各地で注目されている [Rosenthal and Ort 2012]。

アフリカ中南部にはコンゴ盆地を取り巻くように、マメ科ジャケツイバラ亜科の樹木が優占する熱帯乾燥疎開林（ミオンボ林）がひろがっている。本稿で取りあげるザンビア北西部もミオンボ林帯に位置している。このミオンボ林には眠り病を媒介するツェツェバエが生息しているため、人の居住やウシの飼育が妨げられてきた。そのためミオンボ林では希薄な人口密度を背景としながら、畜力に頼らないユニークな農耕を生業とする多彩な民族文化がはぐくまれてきた [掛谷 1993]。ミオンボ林帯には焼畑農耕と移動を繰り返しながら生活するバントゥー系の農耕民が居住しており、彼らはシコクビエ (*Eleusine coracana*)、トウジンビエ (*Pennisetum glaucum*)、モロコシ (*Sorghum bicolor*) などの穀物を主食としながら自給的な生活を営んできた。

ザンビア北部に暮らすベンバは、チテメネという焼畑においてシコクビエを栽培してきた。彼らにとってシコクビエは主食であるだけでなく、社会・文化的にも重要な意味をもつ地酒の材料としても頻繁に使うため、ベンバ農村は年間を通してシコクビエが不足している状態にあった。キャッサバは、食料不足を補う作物として重要な位置を占めてきた [掛谷・杉山 1987]。ベンバがキャッサバを栽培するようになったのは植民地時代であり、チテメネの輪作システムにうまく組み入れていった [杉山 2011]。

ザンビアでは 1920 年代の都市における食料需要の増大にともない、トウモロコシ (*Zea mays*) が栽培されるようになった [児玉谷 1993]。現在ではトウモロコシは、農村部の貴重な換金作物として化学肥料を用いる常畑で栽培され、民間企業や農業公社 (Food Reserve Agency) に販売されている。ザンビア政府は化学肥料を購入する小農に対して購入費用を補助すると同時に、化学肥料の配給も担っている。農民の生活は化学肥料に強く依存するようになっており、政府による肥料の供給が滞ればトウモロコシの収量が低下し、人びとはたちまち食料不足におちいることになる [大山 2002]。そのような状況のなかで、農村の食料自給に果たすキャッサバの役割はますます大きくなっている。

調査地のザンビア北西部では、周辺の農村や都市から出自の異なる移入者を受け入れてきたことで複数の民族が混住するようになっていた。そして、外部から来た移入者と先住者が営む農耕も混在するようになっていった。本稿では、移入者がひろめたキャッサバ栽培に着目しながら、多民族が混住する農村の実態を食料自給という観点から分析する。

2. 調査地の概要

調査地は、ザンビア北西部州ムフンブウェ県シュークウェ地区である（図1）。シュークウェ地区はバントゥー系の農耕民カオンデのチーフの統治下にあり、県都ムフンブウェから約15 kmの距離に位置している。2010年に実施された国勢調査によると、ムフンブウェ県の人口密度は、ザンビア国内で最も低い2.8人/km²であった〔CSO 2012〕。シュークウェ地区の標高は約1,200 m、年降水量は約1,300 mmである。乾季と雨季は明瞭に分かれており、4月から10月までがまったく雨の降らない乾季、11月から3月までが雨季である。

シュークウェ地区には23村あり、243世帯¹⁾、1,320人が幹線道路沿いに集住している。各世帯の世帯主およびその配偶者418人の民族構成は、先住するカオンデが57%（238人）と半数以上を占めており、移入者であるルンダが23%（94人）、ルバレが8%（34人）、チョークウェが8%（32人）、ルチャジが4%（18人）、そのほか（2人）となっている。いずれもミオンボ林で焼畑農耕を営んできた民族であり、母系社会で夫方居住を基本としている。カオンデ以外のルンダ、ルバレ、チョークウェ、ルチャジは、シュークウェ地区外の農村や都市から移り住んだ人びとである。本稿ではルンダとルバレ、チョークウェ、ルチャジの人びとをまとめて移入者とよぶことにする。

移入者であるルンダ、ルバレ、チョークウェ、ルチャジは、17世紀ごろに現在のコンゴ民主共和国にあったルンダ王国から派生しており〔McCulloch 1951; Vansina 1966〕、ムカンダ

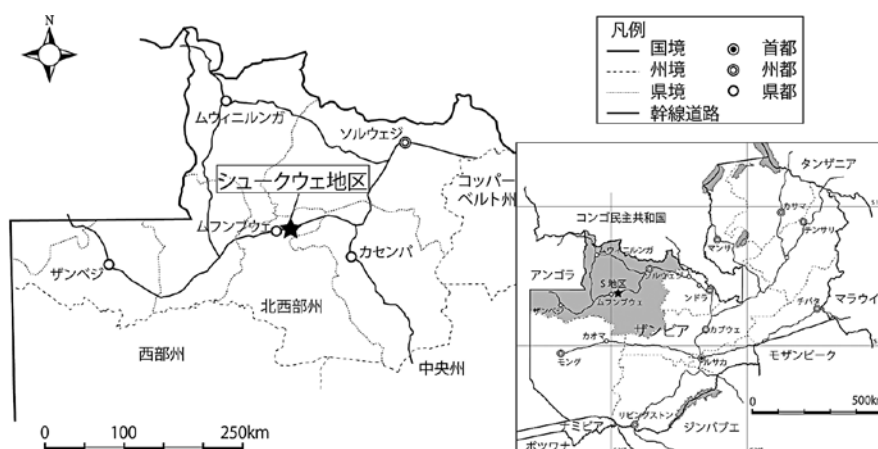


図1 調査地シュークウェ地区の位置

1) 本稿では、台所と食料を共有し生計を同一にする人びとを、ひとつの世帯と定義する。多くの世帯は、夫婦とその子どもから構成される核家族に相当する。

(*mukanda*: L²⁾) とよばれる男子割礼を催し、言語の類縁性が高い [Kashoki 1978; von Oppen n.d.]. 一方でカオンデは 16～19 世紀にかけて、ルンダ王国の東に位置していたルバ王国からクランごとにザンビア北西部へ移動してきた [Jaeger 1981: 54-56].

カオンデは、親族を中心とした 7 世帯ほどの小さな村 (village) をミオンボ林のなかに作り、数年おきに移動を繰り返し、焼畑農耕を営みながら自給を基本として暮らしてきた [大山 2011]. 1960 年代に政府が実施した農村開発計画のあと、人びとは道路沿いに集住するようになっていく。林が村から遠くなるにつれて、焼畑のそばに簡素な出づくり小屋を建てるようになっていった。10～30 村をまとめて地区 (ward) が形成され、地区長が各村をまとめている [Jaeger 1981: 35]. ひとりのチーフが、10 地区程度を統治している。新しい住人の居住や林の開墾は、地区長や村長が許可を出すことになっている。つまりカオンデの社会では、その地域を治めるチーフに権限が集中するのではなく、各地区長や村長の自治が尊重されている。また住人たちは、地区内を移動して新たな村をつくることも許されており、カオンデ社会は村の構成員が離合集散を繰り返す流動的な社会であるといえる。

1960 年代に、移入者がシュークウェ地区に住みはじめたといわれている。その多くは、同じ北西部州内にある他村の出身者である。それぞれ移住の経緯は異なるが、いくつかの農村を転々としてきた人や退職を機に都市から移ってきた人が多い。移住に際して、前の居住地で知り合った友人や同僚を頼って来ることが多いため、シュークウェ地区のような移入者を受け入れる地域は多民族で構成されることになる。

3. カオンデと移入者の農耕形態

3.1 各世帯における主食作物の選択

シュークウェ地区の人びとは、主食作物としてモロコシとキャッサバとトウモロコシの 3 種類を組み合わせ栽培している。北西部州では古くからモロコシとキャッサバが焼畑で栽培されてきた。モロコシはカオンデの最も重要な主食である [Melland 1967 (1923); Trapnell and Clothier 1957; Crehan 1997; 大山 2011 など]. 一方でルンダ、ルバレ、チョークウェ、ルチャジの主食はキャッサバである [Trapnell and Clothier 1957; Turner 1968 (1957); Pesa 2012; von Oppen n.d. など]. ルンダは「キャッサバはわたしたちのチーフである」とキャッサバを崇めるように、自分たちとの結びつきを象徴的に語る [Pesa 2012]. このようにシュークウェ地区では、先住のカオンデと移入者たちのあいだで基幹作物が異なっているのである。

すべての世帯が、これらの 3 種類の作物を栽培しているわけではないが、聞き取り調査を実施した 121 世帯が共通してトウモロコシを栽培していた (表 1). モロコシを栽培している

2) 本稿では、カオンデ語とルンダ語をイタリック体で表記している。カオンデ語には末尾に K を、ルンダ語には L を併記することとする。

表1 各世帯が栽培する主食作物（2012年）

世帯の民族	モロコシ		キャッサバ		トウモロコシ	
	世帯	%	世帯	%	世帯	%
カオンデ世帯（61世帯）	18	30	31	51	61	100
カオンデ通婚の世帯*（16世帯）	1	6	11	69	16	100
移入者の世帯（44世帯）	0	0	40	91	44	100
合計（121世帯）	19	16	82	68	121	100

* 夫または妻のどちらか一方がカオンデの世帯。

のはカオンデのみであった。移入者44世帯のうち40世帯（91%）は、キャッサバを育てていた。カオンデ世帯の約半数もキャッサバを栽培していたが、その規模は小さく、数畝ほどの補助的なものであった。このようにカオンデと移入者は同じ地区に住みながら、異なる作物を主食として栽培している。次項からは、カオンデのモロコシ栽培と移入者のキャッサバ栽培の農耕システムをみていこう。

3.2 カオンデのモロコシ栽培

カオンデは、ブジミ（*bujimi*: K）とよばれる焼畑農耕をおこなっている。ブジミは、カオンデ語の「土を耕す」という動詞クジマ（*kujima*: K）を語源とする [大山 2003]。雨季が終わりに近づく2月末になると、カオンデの男たちは新たな開墾地を探しはじめる（図2）。カオンデは、林床にキバベ（*kibabe*: K, *Hyparrhenia* spp.）という草本が生い茂ったミオンボ林がモロコシの栽培に適していると考えている [大山 2003]。焼畑で栽培する作物は自給用のモロコシのほか、トウモロコシやシコクビエ、ゴマ（*Sesamum indicum*）、サツマイモ（*Ipomoea batatas*）、カボチャ（*Cucurbita* spp.）、インゲンマメ（*Phaseolus vulgaris*）などである。

開墾地では樹木を伐採するまえに草本のキバベを鋤きこみ、15 cm ほどの深さまで表土を反転させるように耕起して腐植を促すことで、表土に養分を供給する。樹木の伐採には男性、耕起には女性が従事することが多い。男性は切り倒した樹幹を細断し、積みあげて乾燥させる。乾季が終わりに近づいた10月末は、1年のなかで最も暑く乾燥しており、火入れに適した時期であるが、それでも積みあげた丸太がきれいに燃え尽きることは少ない。燃え残った丸太を積みあげ、ふたたび火をつけることもある。

モンデ（*monde*: K）とよばれる火入れ跡地には、カボチャやゴマ、シコクビエを先に播種する。この地域ではモンデのほかに、マウンドや畝をつくらぬ畑ムンクルトゥ（*munkulutu*: K）、マウンドを造成した畑ミララ（*milala*: K）でもモロコシを栽培する。ムンクルトゥは、雨が本格的に降り始めるまえまでに準備しておく。雨が降り始める11月ごろにトウモロコシを播種し、それが腰の高さほどに生長したころ、株間にモロコシとゴマの種子をたたきつけるように播く。

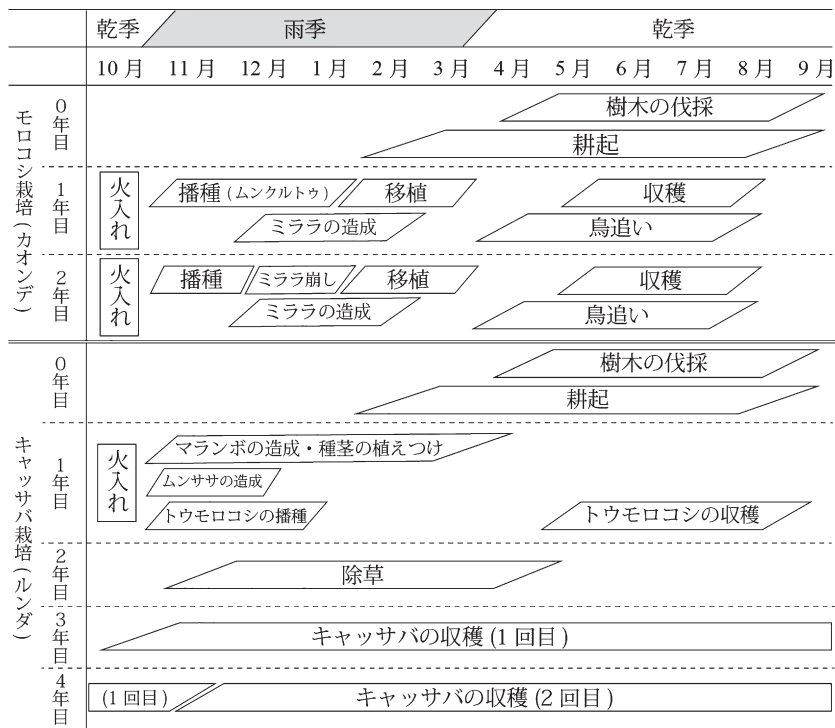


図 2 農事暦 (カオンデのモロコシ栽培とルンダのキャッサバ栽培)

雨が安定して降るようになる 12 月以降には、マウンドの畑ミララを耕す。1 月にはムンクルトゥのモロコシはひざの高さほどに生長しており、密度が高い場所を間引きながらミララへ移植していく。雨の翌日は土壌が湿っているため、モロコシの移植に適している。抜き取ったモロコシの葉先を 15 cm ほど手でむしり取り、苗の水分が失われないように蒸発散する面積を減らしてから、1 本ずつマウンドに移植する。カオンデは 3 種類の畑を使い分けることで労働の時期を分散している [大山 2003]。

モロコシは 4 月ごろに出穂し、7 月ごろに収穫される。モロコシの穀粒は鳥の被害にあいやすいため、出穂から収穫までのあいだ、女性や子どもたちが鳥を追いはらう。毎日、日の出から日の入りまで「クァークァー」という大きな声をだし、金属製のなべをたたいて鳥がモロコシに近づかないようにする。6 月ごろからモロコシの収穫がはじまる。モロコシは草丈が人の背丈を超えるので、穂を収穫しやすくするために丸太や足で稈を倒し、翌日にナイフでモロコシの穂を刈り取っていく。穂は簡素な穀倉で乾燥・保存し、食べる直前に木の枝でたたいて脱穀する (写真 1)。農繁期の 12~2 月や収穫期の 5~8 月には、カオンデは出づくり小屋で過ごす。収穫が終わると、彼らはようやく村に帰ることができる。しかし近年では大変な鳥追いや、病院・学校から遠い出づくり小屋での生活を嫌がって、モロコシ栽培をやめる人も増えてきた。



写真1 モロコシの脱穀

トウモロコシと異なり、脱穀の必要なモロコシは粉にするまでに手間と時間がかかる。夕食のためには昼食後から脱穀をはじめ、実と殻をより分けたうえで、製粉する必要がある（2012年8月8日筆者撮影）。

3.3 移入者によるキャッサバの栽培と利用

シュークウェ地区に移住してきたルンダ、ルバレ、チョークウェ、ルチャジは焼畑でキャッサバのほかにトウモロコシやサツマイモ、カボチャ、インゲンマメなどを栽培している。これら4つの民族の農耕形態は類似しているため、ここではルンダの農業をルンダ語で説明していく。ルンダは、畑に適した樹木が生育する未開墾のミオンボ林をあらかじめ見つけておき、雨季の後半に耕起しはじめる。乾季に入ってしばらくすると、男性が樹木を伐採していく。伐採した丸太は運びやすいように細かく切って積みあげておく。ルンダは10月下旬になると、雨季の到来を知らせる最初の雨の時期を見きわめ、その直前に積みあげた丸太に火をつける。

11月に入ると、この焼畑にキャッサバを植えつけるためのマランボ（*malambo*: L）という大きなマウンドをつくりはじめる（写真2）。マランボは高さが30～50 cmもあり、キャッサバのイモが肥大しやすいように作土層が厚くなっている。11月から4月のあいだ、マランボをつくってはキャッサバを植えつけるという作業を繰り返す。植えつけでは、ンディンブ（*ndimbu*: L）というキャッサバの種茎を地面に挿していく。キャッサバを植えたマランボの四隅にトウモロコシやサツマイモ、インゲンマメなどを混作する。マランボづくりには多くの時間と労力を要するため、家族総出の作業になる。労働力の少ない世帯では、親族や友人などを雇うこともある。

労働力を確保できなければ、マウンドをつくらないムンササ（*munsasa*: L）という畑でキャッサバを育てることもある。ムンササでは、10～12月に耕した表土を鍬でならして種茎



写真2 キャッサバを植えつけるマウンド（マランボ）の造成
雨季になり、地表がやわらかくなってからマランボの造成をはじめ（2011 年 11 月 7 日筆者撮影）。

を植えつけ、あとから種茎の周囲に土を盛っていく。ムンササは作土層が浅く収量が低くなるため、シュークウェ地区ではもっぱらマランボでキャッサバが栽培されている。

キャッサバと混作したトウモロコシやサツマイモなどの作物は、植えつけてから約半年で収穫できるが、キャッサバの収穫は植えつけてから 2 年が経過した 3 年目の雨季からはじまる。キャッサバの収穫は女性の仕事である。株ごと掘り起こすのではなく、肥大したイモだけを選びながら収穫していく。女性たちは地面のひび割れ具合からイモの大きさを判断し、周囲のイモを傷つけないように丁寧に掘りとっていく。地中に残された小さなイモはそのまま肥大をつづけるので、選択的に収穫することで株あたりの収量を最大化することができる。4 年目になると、ほとんどのイモが肥大しているのので、株ごと引き抜いて収穫する。

キャッサバの加工と調理も女性の仕事である。キャッサバには有毒成分が含まれているため [Jones 1959]、水で満たしたドラム缶にイモを浸して毒抜きする。雨季には小さな水たまりにイモを浸すこともある（写真 3）。毒抜きしたイモは天日で干して乾燥させる。雨季には、台所のかまどのうえでイモを乾かす。夜のあいだに火が消えてしまわないように、数時間おきにかまどに薪をくべる。完全に乾くまでには数日を要し、雨季のイモの乾燥はことのほか手間のかかる作業なのである。乾燥したイモを杵と臼でついて製粉すると、ようやく調理できる状態になる。

ルンダの人びとはよく、「キャッサバの種茎は銀行のようなものだ」と語る [原 2013]。キャッサバのイモは、収穫しなければ何年も畑に「貯める」ことができ、必要に応じていつでも畑からイモを「引き出す」ことができる。また種茎を植えつけるだけで、容易にイモを「増



写真3 季節湿地におけるキャッサバの毒抜き

水に浸したキャッサバは水を吸って発酵しているため、非常にやわらかい。女性たちは、その場で表皮と維管束を取り除いてから、頭に載せて持ち帰る（2015年2月6日筆者撮影）。

やす」こともできる。彼らにとって、キャッサバは安定した生産と安全な貯蓄を兼ね備えた信用できる「銀行」なのである。

4. カオンデと移入者の食事

カオンデが栽培するモロコシやトウモロコシなどの穀物は、降雨変動のような気象や化学肥料の供給量に収量が大きく左右される。一方でキャッサバは、生育しながら地中で「貯蔵」できるため、いつでも収穫することができて基幹食料としての安定性が高い。以下では、収穫期の直後（2014年9月）と端境期（2015年3月）の食事日誌の分析を通して、カオンデとルンダが穀物とキャッサバをどのように使い分け、組み合わせて日々の食生活を送っているのかを検討していく。

ザンビアの主食は、シマ（*nshima*）とよばれる団子である。シマは毎食のように食されており、トウモロコシやモロコシ、キャッサバなどのデンプン粉を熱湯に入れて団子状に練りあげたものである。シマとともに食べるおかずは、鶏肉や豚肉、干した川魚などの動物性食材のほか、インゲンマメ、サツマイモの葉やキャッサバの葉などの葉菜類である。ザンビアでは、シマは日本人にとっての米飯と同じであり、彼らは毎食シマを食べることを基本としており、「シマがない」ことはひもじさや貧しさを意味する。

カオンデのM氏は夫婦と子どもたちの8人家族で、2014/2015年の雨季にはトウモロコシとサツマイモを混作し、畑の縁で小規模にキャッサバを栽培している。シュークウェ地区で生

まれ育った M 氏は、彼のオジが村長を務める村に居住している。

一方、移入者であるルンダの T 氏は夫婦と子どもと孫の 8 人暮らしである。2014 年には新しくキャッサバ畑を開墾し、トウモロコシやサツマイモを混作している。北西部州ムウィニルンガ県の農村で生まれた T 氏は、ムフンブウェの県庁で働いていた兄を頼ってシェークウェ地区へ移住してきた。

モロコシとトウモロコシの収穫直後である 9 月の 1 週間（2014 年 9 月 16 日～22 日）に、それぞれの世帯がとった食事の内容を検討しよう（表 2）。まずは M 家（カオンデ）であるが、すべての食事 14 回のうち 12 回でトウモロコシ、残りの 2 回でモロコシのシマを食べていた。ルンダの T 家の食事をみると、キャッサバとトウモロコシを混ぜたシマを全食事 13 回のうち 8 回、サツマイモだけが 3 回、トウモロコシのシマが 2 回であった。T 家にかぎらず、キャッサバを中心に栽培している世帯もトウモロコシを日常的に食べている。キャッサバの粉にトウモロコシの粉を混ぜることで、キャッサバ特有の発酵臭や強い粘りがやわらいで食べやすくなるといわれている。しかし穀物が収穫された直後には、カオンデもルンダも穀物だけのシマを食べていた。

表 2 カオンデと移入者の各世帯における食事回数

収穫期：2014 年 9 月 16 日～22 日（7 日間）

主食	カオンデ M 家	ルンダ T 家
シマ		
トウモロコシ	12	2
モロコシ	2	—
キャッサバ+トウモロコシ	—	8
シマ以外		
サツマイモ	—	3
合計	14	13

端境期：2015 年 3 月 4 日～10 日（7 日間）

主食	カオンデ M 家	ルンダ T 家
シマ		
トウモロコシ	3	—
キャッサバ	5	—
キャッサバ+トウモロコシ	5	14
シマ以外		
ゆでトウモロコシ	1	1
ゆでカボチャ	1	—
合計	15	15

ここからはそれぞれの世帯が、モロコシとトウモロコシの端境期である3月（2015年3月4日～10日）にとった食事を検討する（表2）。カオンデのM家ではトウモロコシのシマが全食事15回のうち3回にまで減少し、モロコシを食べることはなかった。かわりにキャッサバだけのシマが5回、キャッサバとトウモロコシを混ぜたシマが5回と、キャッサバを頻繁に食べるようになっていた。M氏は、「好きでキャッサバを食べているわけではない」と言う。端境期には、モロコシやトウモロコシなどの穀物が底を尽きかけていたため、調査期間だけで2回も乾燥キャッサバをほかの世帯から購入していた。そうすることで、トウモロコシの消費量をおさえていたのである。またシマを食べずに、ゆでたカボチャやトウモロコシで食事を終わらせることもあった。2月の終わりごろからカボチャや未熟トウモロコシの収穫がはじまると、それらをゆでて間食にするか、メインの食事に行っていた。

一方ルンダのT家では、端境期の3月にはキャッサバとトウモロコシを混ぜたシマが、全食事15回のうち14回を占めていた。T家は収穫直後の9月であれ、端境期の3月であれ、好んでキャッサバとトウモロコシを混ぜたシマを食べており、年間を通して食事が安定していた。

5. 端境期におけるカオンデ世帯の食料確保

カオンデのM家はキャッサバを食事に取り入れることで、穀物の端境期にもシマを食べることができていた。すなわち穀物を主食とするカオンデにとって、端境期が存在しないキャッサバは、穀物消費を節約できる食物として重要な意味をもっている。カオンデのM家のように、移入者たちが近くでキャッサバを栽培してくれることで、端境期に乾燥キャッサバを簡単に購入することができるようになっているのである。

カオンデのG氏とルンダのL氏は、同じ教会に通う友人である。2013年1月、モロコシとトウモロコシの貯蔵量が少なくなったG氏は、キャッサバを入手するため、収穫したばかりのインゲンマメをバケツ一杯分（約5リットル）携えてルンダのL氏の家を訪問した。その年にはL氏はインゲンマメを栽培しておらず、バケツ一杯分の乾燥キャッサバと交換してくれた。

2003年1月、前年に雨が降りすぎたため、カオンデのK氏はモロコシとトウモロコシが不作であった。穀物にかわる食料を探していたところ、乾燥キャッサバを道ばたで販売していたルンダのL氏に出くわした。K氏はL氏と交渉して、キャッサバ畑でマウンドをつくる報酬として乾燥キャッサバを分けてもらえることになった。K氏はその後も何度かL氏のもとで働き、その報酬として乾燥キャッサバを得ることで、その年の食料不足を乗り切ることができた。

シュークウェ地区ではルンダ、ルバレ、チョークウェ、ルチャジがキャッサバを栽培してい

る。カオンデは主食材料が不足すると、キャッサバを栽培している隣人や友人の家を訪ねまわってキャッサバを探し、肉やインゲンマメ、労働力と交換している。キャッサバをもたない先住者のカオンデは、キャッサバを栽培する移入者を受け入れ、彼らと共住することで端境期における食料不足を回避していた。

6. おわりに—キャッサバがもたらす生活の安定

移入者たちは、シュークウェ地区へ移住したあともキャッサバを栽培しつづけてきた。一方カオンデは、伝統的な食料であるモロコシに強い愛着をもっていた。両者の農業は混じり合うことがないまま、それぞれの農法がそれぞれの世帯で踏襲されてきた。しかしモロコシやトウモロコシの生産性は決して高くなく、毎年 1～3 月の端境期には穀物が不足する。カオンデにとっては、この時期をどうやって乗り切るかが長年の課題であった。モロコシやトウモロコシの収量は気象条件によって大きく変動し、最近では化学肥料を使うようになっているため農業政策の変化にも左右される。カオンデは端境期の食料を確保するため、焼畑にサツマイモやカボチャ、早生トウモロコシを混作するといった手だてを講じてきた。2002 年にカオンデの別の農村で食事を調査した大山〔2011〕は、端境期にはカオンデが未熟トウモロコシの穂をすりおろし、それを乾燥させてシマを調理していたが、キャッサバを食べることはほとんどなかったと報告している。シュークウェ地区でも未熟トウモロコシをすりおろしてシマにすることはある。しかしその一方で 1940 年代の記録には、カオンデが多量のキャッサバを他県に居住するルバレから入手していたという記事も残っている〔White 1959〕。キャッサバを介したカオンデと周辺民族との交流が、古くから不作年に敢行されていた可能性はある。

移入者たちが栽培するキャッサバは年間を通して利用でき、穀物の粉と混ぜてシマに調理することもできるため、カオンデにとっても食料を保管するうえで絶好の食材である。ルンダ、ルバレ、チョークウェ、ルチャジは、キャッサバの栽培やイモの加工技術に精通しているため、彼らの村では一年中乾燥したイモを手に入れることができる。シュークウェ地区に暮らすカオンデにとって、移入者たちが同じ地区に居住していることで、端境期であっても容易に乾燥したキャッサバを入手できる。農耕様式の異なる民族が居住することで、その地域の食料事情が飛躍的に安定していったと考えられる。

キャッサバは、シュークウェ地区やムフンブウェの市場において販売されており、いつでも購入することができる。またキャッサバは年間を通して収穫できるため、価格もあまり変動せず、穀物の端境期には比較的安価で販売されている。しかしトウモロコシをおもな現金収入源としている世帯にとって、端境期には食料とともに現金も不足しており、毎日主食材料を購入するのは難しい。シュークウェ地区では、日常的に労働力（キャッサバ畑でのマウンドづくり）とキャッサバのイモが交換されており、現金をもたない世帯でも端境期に食料を入手する

ことができるようになっていく。これは彼らが同じ地区に共住したからこそ可能になった新たな関係である。

現在では、カオンデにとって移入者たちが育てるキャッサバが、端境期には欠かせない食料として定着しつつある。複数の民族が同じ地域内でそれぞれの食文化を堅持し、農耕形態を維持してきたことで地域の農耕や食生活が多様化し安定していったのである。シュークウェ地区では、キャッサバを介した食料と労働の交換が民族の交流を深め、先住者と移入者の異なる民族が互いに助け合う新たな関係が構築されようとしている。

謝 辞

本稿の骨子は、京都大学学際融合教育研究推進センター総合地域研究ユニット臨地教育支援センターによる「2013 年度国際研究発信力プログラム リサーチ C&M」から支援を受け、ザンビア大学経済社会研究所（2013 年 9 月 12 日）およびオーストラリア国立大学社会科学部（2013 年 9 月 25 日）において開催した、“Livelihood, Social Ties, and Inter-personal Relationships in Agricultural Communities: The Social Dynamics in Southeast Asia and Southern Africa”において発表しました。本稿にかかる現地調査は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科フィールドワーク・インターンシッププログラム（2011・2012 年度）、日本学術振興会科学研究費補助金（13J02843）（2013～2015 年度）によって可能となりました。本稿の執筆にあたって、京都大学の大山修一先生や査読者の方々をはじめとした多くの方々に、貴重なご助言をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

引 用 文 献

- Carter, S. E., L. O. Fresco, P. G. Jones and J. N. Fairbairn. 1997. *Introduction and Diffusion of Cassava in Africa*, IITA Research Guide 49. <http://old.iita.org/cms/details/trn_mat/irg49/irg49.html> (2014 年 6 月 21 日閲覧)
- CSO (Central Statistical Office). 2012. *Zambia 2010 Census of Population and Housing: Population Summary Report*. Lusaka: Central Statistical Office.
- Crehan, K. 1997. *The Fractured Community: Landscapes of Power and Gender in Rural Zambia*. Berkeley, Los Angeles and California: University of California Press.
- FAO STAT (Food and Agriculture Organization of the United Nations, Statistics Division). 2015. *Cassava Production Share by Region (Average 2012-2013)*. <<http://faostat3.fao.org/browse/Q/QC/E>> (2015 年 12 月 1 日閲覧)
- 原 将也. 2013. 「キャッサバの種茎は銀行と同じだーザンビア農村の生活世界」『アジア・アフリカ地域研究』13(1): 66-69.
- 伊谷樹一. 1995. 「タンザニア・トングウェの農耕」渡部忠世監修『農耕の世界、その技術と文化Ⅱーアフリカと熱帯圏の農耕文化』大明堂, 69-94.
- Jaeger, D. 1981. *Settlement Patterns and Rural Development: A Human Geographical Study of the Kaonde Kasempa District, Zambia*. Amsterdam: Royal Tropical Institute.
- Jones, W. O. 1959. *Manioc in Africa*. Stanford: Stanford University Press.
- 掛谷 誠. 1993. 「ミオンボ林の農耕民ーその生態と社会編成」赤阪賢・日野舜也・宮本正興編『アフリカ研究一人・ことば・文化』世界思想社, 18-30.

- 掛谷 誠・杉山祐子. 1987. 「中南部アフリカ・疎林帯におけるベンバ族の焼畑農耕—チテメネ・システムの諸相」牛島巖編『象徴と社会の民族学』雄山閣出版, 111-140.
- Kashoki, M. E. 1978. The Language Situation in Zambia. In S. Ohannessian and M. E. Kashoki eds., *Language in Zambia*. London: International African Institute, pp. 9-46.
- 児玉谷史朗. 1993. 「ザンビアにおける商業的農業の発展」児玉谷史朗編『アフリカにおける商業的農業の発展』アジア経済研究所, 63-124.
- McCulloch, M. 1951. *The Southern Lunda and Related Peoples*. London: International African Institute.
- Melland, F. H. 1967 (1923). In *Witch-bound Africa: An Account of the Primitive Kaonde Tribe and Their Beliefs*. London: Frank CASS and Co. Ltd.
- 村尾るみこ. 2012. 『創造するアフリカ農民—紛争国周辺農村を生きる生計戦略』昭和堂.
- 大山修一. 2002. 「市場経済化と焼畑農耕社会の変容—ザンビア北部ベンバ社会の事例」掛谷誠編『アフリカ農耕民の世界—その在来性と変容』京都大学学術出版会, 3-49.
- . 2003. 「ザンビアの焼畑農耕ブジミにおける農耕空間の多様性」『エコソフィア』12: 100-119.
- . 2011. 「アフリカ農村の自給生活は貧しいのか?」『E-journal GEO』5: 87-124.
- Pesa, I. 2012. 'Cassava is Our Chief': Negotiating Identity, Markets and the State through Cassava in Mwinilunga, Zambia. In J. B. Gewald et al. eds., *Transforming Innovations in Africa: Explorative Studies on Appropriation in African Societies*. Leiden and Boston: Brill, pp. 169-190.
- Rosenthal, D. M. and D. R. Ort. 2012. Examining Cassava's Potential to Enhance Food Security under Climate Change, *Tropical Plant Biology* 5: 30-38.
- 末原達郎. 1990. 『赤道アフリカの食糧生産』同朋舎.
- 杉山祐子. 2011. 『『ベンバ的イノベーション』に関する考察—個別多発的イノベーションと抑制の平準化・促進の平準化』掛谷誠・伊谷樹一編著『アフリカ地域研究と農村開発』京都大学学術出版会, 215-246.
- Trapnell, C. G. and J. N. Clothier. 1957. *The Soils, Vegetation and Agricultural Systems of North-western Rhodesia*. Lusaka: The Government Printer.
- Turner, V. W. 1968 (1957). *Schism and Continuity in an African Society: A Study of Ndembu Village Life*. Manchester: Manchester University Press.
- Vansina, J. M. 1966. *Kingdoms of the Savanna*. Madison: The University of Wisconsin Press.
- von Oppen, A. n.d. *Terms of Trade and Terms of Trust: The History and Contexts of Pre-colonial Market Production around the Upper Zambezi and Kasai*. Münster and Hamburg: LIT Verlag.
- White, C. M. N. 1959. *A Preliminary Survey of Luvale Rural Economy*. Northern Rhodesia: The Rhodes-Livingstone Institute.